

明治維新前夜の薩摩藩とナサニエル・ホーソーンの時代のアメリカ

——島津斉彬の業績を中心に——

A Consideration on Satsuma Clan on the Eve of the Meiji Restoration and the United States of America in the Times of Nathaniel Hawthorne —Focused on the Achievements by Shimazu Nariakira—

高島 まり子

Mariko Takashima

鹿児島女子短期大学

抄録：1854年、マシュー・C・ペリー (Matthew C. Perry) は日本での日米和親条約締結を平和裏に成就させてアメリカに帰国する途中、1853年から57年まで在英米領事としてリヴァプールに滞在したナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne) のところへ立ち寄り、日本遠征の記録の執筆を依頼した。アメリカの史実を素材とする優れた歴史物語を多数執筆し、1850年に出版された『緋文字』(The Scarlet Letter) によって19世紀アメリカを代表する国民的作家の地位を築いていたホーソーンであれば、ペリーが自身の成し遂げた国家的大事業の記録の執筆を——広く一般の人々に読まれ得る「読み物」とすることを望んで——彼に依頼しても不思議ではない。ホーソーンとの関連性を軸に、アメリカにとっての明治維新前夜の日本の位置づけを、特にその近代化を牽引した薩摩藩の動きを中心に考えてみたい。その際、今年2015年にユネスコの世界文化遺産に認定された「明治産業革命遺産」⁽¹⁾ において、鹿児島県内の世界遺産に登録された集成館事業の生みの親である第11代薩摩藩主たる島津斉彬を中心に考察する。

キーワード：日本開国、プロヴィデンス、蘭癖大名、集成館事業、近代化

はじめに

ペリーの日米和親条約締結 (1854年) に至る事業を記録した『日本遠征記』(Commodore Perry and the Opening of Japan: Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, 1852-1854, 2005) によると、1853年7月8日の深夜、ペリーが艦隊を引き連れて浦賀に停泊中に夜空を煌々と照らし出す「流星」のようなものが出現したという描写がある。

その夜、当直のデューア大尉が興味深い気象現象を観察した。彼は深夜から明け方の4時まで目撃されたその珍しい天体を流星として述べている。それは南西の方角に現れ、空一面を照らした。艦船の帆柱、帆、船体は、各艦から一斉に青い炎を発して燃えているかのように、鮮明に租の閃光を反射した。南西の方角、水平線上約15度のところからその流星は北東に向かって長い間隔を一直線に走り、次第に海面に向かって落ちてゆき、姿を消した。その形は赤い楔形の尾を引く大きな青い球体で、その尾は灼熱する粒子から成っているのが容易に観察され、のろしが爆発するときに見える火花に似ていた。(Hawks 233)

中西佳世子は、これが19世紀アメリカを代表する国民的作家であるナサニエル・ホーソーンの代表作『緋文字』12章の一場面にヒントを得たものではないかと述べる(中西 364-68)。その場面では、燃える流星が夜空に描き出した「鈍く赤い光で縁取られた」巨大なAの文字が、主人公の内面に秘められた罪を暴露すると同時に、17世紀のプリマス植民地の運命を予言する神意(Providence: プロヴィデンス)の表れと解されている。以下にこの場面を引用する。

当時であっては、流星の出現やその他の自然現象のうち、太陽や月の出入りほど規則的に起こらないものはなんでも超自然的なるものの啓示であると解釈するのがならいであった。(中略) 国の運命が天空に描かれる荘厳な

象形文字によって具現するというのは、まことに壮大な考えである。神（プロヴィデンス）が一国の民の運命を書き記す巻物として、空が広すぎることはなからう。こういう信念を我々の先祖たちが好んで抱いたのは、いまだに幼い自分たちの共和国が格別に親身で厳しい天の加護のもとにある証拠であると考えたからである。（CE I, 154-55）」⁽²⁾

そして作者ホーソーンは、翌朝に寺男の口から、彼らもそのAの文字を見たこと、それは‘Angel’（天使）のAで、その夜死んだウインスロップ総督が天使になった証であるとするピューリタン共同体の解釈を語るのである。

このように天変地異にアメリカ国家の運命についての神の啓示を読み込む17世紀のプロヴィデンス（神意、あるいは神そのものを指す）言説が『日本遠征記』の「流星」観察の記録にも読み取れると考える中西は、「ホーソーンとペリーの両者の記述には、自然現象をヒエログリフと捉え、そこにアメリカを導く神のメッセージを読み取るパターンが共有されていることがわかる」（367）と述べる。本稿では、ペリー来航による日本開国という明治維新前夜の大事件とアメリカの国民的作家ナサニエル・ホーソーンに微妙な接点があったことを糸口に、当時の日本の近代化を牽引した薩摩藩主である島津斉彬を中心に日米関係を考えてみたい。まず、流星の描写を挟んでペリーとホーソーンについて考察する。

1. ペリーとホーソーンにおけるプロヴィデンス言説

ホーソーンの代表作『緋文字』の流星の場面に描かれているような、17世紀アメリカ植民者の「神に導かれるアメリカ」という神話は、18世紀には「独立革命において、イギリスからの分離を正当化し、新国家の統一ヴィジョンを提供する役割を果たし」、連綿として19世紀にまで国民の間に受け継がれ、民主主義共和国の実現を目指す当時の「プロヴィデンスに導かれて西へと広まりゆく文明という進歩思想」を表すオサリヴァン（O'Sullivan）の「明白な宿命」論がアメリカの膨張主義を正当化する基盤となった、と中西はアメリカにおけるプロヴィデンス言説の流れを俯瞰する（中西 370）。そして19世紀のプロヴィデンス言説と日本開国との関連性に着目し、「神に導かれるアメリカ」という神話がペリーによる日本開国にいかにか作用したかを論じ、その視点は示唆に富む。当時の民主党や対立するホイッグ党の政党機関紙の日本開国に関する記事は、日本の孤立は民主主義共和国の共同体形成という神との契約の遂行を阻むものであると捉え、開国を進めることがプロヴィデンスに沿ったアメリカの使命であるという論調の共有が見られるという。更にホイッグ党の機関紙は、アヘン戦争を行ったイギリスの政策を批判し、アメリカは暴力に訴える意志を持たないとして、プロヴィデンスに導かれて発展する新国家アメリカという理想を強調することで、「旧世界との差別化を図り、イギリスとは一線を画する方針で日本開国に臨むことを主張」したという（371-73）。中西は、ペリーがこのような世論や政治的状况を意識し、自らの日米和親条約締結という国家的大事業の遂行をアメリカの神話の中に組み込むうえでも、国民的大作家ホーソーンの代表作に描かれたプロヴィデンスの表出としての流星と類似した表象を借用したのではないかと論じるのである。

この推論は、ペリーが日本での条約締結を平和裏に成就させて帰国する途中、1853年から57年まで在英米領事としてリヴァプールに滞在したホーソーンのところへ1854年12月28日に立ち寄り、日本遠征の記録の執筆を依頼したという事実に基づいている。史実を素材とする優れた歴史物語も多数執筆しているホーソーンであれば、ペリーの依頼も奇異というわけではなかったかもしれない。しかし、彼は領事職の多忙を理由に依頼を断り、この遠征記はホークス（Francis L. Hawks）によって執筆・刊行された。中西は、現実と想像の世界の「中間地帯」を描くロマンス作家を自負していたホーソーンが事実を記述すべきこの種の著述に消極的であったのは当然とする一方、ペリーがそのような特性を持つ作家に執筆を依頼したことの意味を考察したのである。その結果、彼が『緋文字』に登場する夜空の象形文字Aにプロヴィデンスを読み取る17世紀のピューリタンの心性と19世紀の「明白な宿命」論を結びつけるようなロマンスの視点を、作家に期待していたのではないかという推理に基き、執筆は断られたものの、実際の『日本遠征記』には既述したような壮大な夜空の啓示ともいべき場面が挿入された、という結論に至るのである。

実際には、ホーソーン自身はそのような17世紀の先祖たちのアレゴリカルかつ自我肥大的な自然現象の解釈には批判的な面もあった。『緋文字』では、秘密の姦淫（Adultery）の罪に苦しむ牧師ディムズデルが夜空に巨大な赤いAを見たのは「精神がひどく錯乱している兆候」であり、彼の「目と心の病」のせいであるとする19世紀的な見方をも並列して提示する（CE I, 155）。常に相反する見方や複数の視点を同時に提示するこの作家特有のテクニックではあるが、19世紀のアメリカの膨張主義に批判的であったことは、さまざまな作品にも明らかである。大井浩二もホーソーン作品の分析において、『緋文字』に見られるキリスト教的「庭園の神話」に裏打ちされた17世紀植民地時代のピューリタンの心性には、ホー

ソーンの生きた19世紀アメリカの利己的な国家主義が反映されており、作家は作中で当時のアメリカの独善的な膨張主義を暗に批判したのだと論じている(大井 112-49)。また中西も、彼ほどプロヴィデンスという語や概念を作品に用いた作家はいないとしながらも、「あまりにナショナリスティックで恣意的なプロヴィデンスの言説やそれに基づく政策には批判的であった」(中西 379)と述べる。即ち、ペリーとホーソンとは「プロヴィデンスに導かれるアメリカ」という政治的理念は共有しつつも、その理念の受け止め方の質は異なっており、ホーソンの場合はペリーのオサリヴァンの認識とは対照的に、むしろ性急で強引な政策には批判的立場であった。つまり、「デモクラシーを推し進める民主党の方針に合致する言説を用いながら、一方でプロヴィデンスという概念が生み出す曖昧さを利用して、こうした国家のありようを暗に風刺したりしている」(379)と中西が述べるように、ホーソン流のプロヴィデンスは、事態の緩やかな成熟を見守る態度を意味することが多いように思われる。それが、逆に大統領選に臨む親友ピアスに依頼された『ピアス伝』執筆において、奴隷制維持を支持していたピアスの立場を擁護し、プロヴィデンス言説を使ってそれを表明した文章によって批判されるという事態を招くこともあった(CE XXIII, 352)。

ところで、ペリーは実際にそのような自然現象を見たのではなく、単に報告を受けただけである。中西も指摘するように、それが流星であったか彗星であったかも記録では曖昧であり、観測された時間や楔形の尾などから、彗星であったとも考えられる。江戸時代末期の日本での天文記録では、クリンケルフェース彗星(1853年9月)が時期的には最も近いが、9月にはペリーは浦賀を離れた後である。肉眼で最もはっきり観察されたのは1858年の8月から11月にかけてのドナチ彗星で、中西も岩倉実相院から出てきた古文書に記録されたこの彗星について触れている(中西 380-81)。山口県下関市の福仙寺でも江戸末期に現れた3つの彗星を克明に描いた絵が見つかり、そのうちの1つがドナチ彗星であるという(spac esite.biz/index.htm)。また、萩博物館にはこの彗星が描かれた古文書があり、それは市内の旧家の襖の下張りから出てきたもので、江戸に滞在していた萩藩士の三戸茂内が萩の父親に宛てた手紙だそうである。手紙には1858年に徳川斉昭と井伊直助の対立による政変が起こったために悪星(ドナチ彗星)が出現したのではないかと述べられている(hagihaku. ex blog.jp/20130372/)。この政変とは、井伊直助が突然大老に就任し、6月19日に勅許を得ることなく日米修好通商条約を結んだことを責めた徳川斉昭を、逆に謹慎処分にした一件を指しているのであろう。翌59年には井伊が尊王攘夷派を弾圧した「安政の大獄」が起こり、翌59年3月の「桜田門外の変」に繋がっていく。このように日本国内では、ドナチ彗星は幕末の動乱時に不安を抱える人々に、国家的凶事を予兆する不気味な現象として理解された場合が多いようで、NHK大河ドラマ『八重の桜』でも妖霊星として登場したことは記憶に新しい。しかしながら、1858年7月16日に死去した斉彬に関連付けた記録は見当たらない。薩摩藩と中央政権内部では重大事ではあっても、当時の一般庶民には幕閣の重要なポストについていたわけでもない斉彬のことは、それほど強く認識されていなかったのであろうか。しかしながら、このドナチ彗星は、ペリーが経験したとされる1853年の自然現象から5年後のことである。やはり中西が指摘するように、『日本遠征記』の一場面は、「明白な宿命」に代表される膨張主義への支持が圧倒的であったアメリカ本国の世論を意識しつつ、自己の業績にプロヴィデンス言説を重ねて壮大な国家的ロマンスの色合いを付加したかったペリー自身の思いや使命感が招いた創作の意味合いが強いかもしれない。

とはいえ、夜空の壮大な星々のショーにまつわるこのエピソードは、当時の世界情勢において東洋で鎖国を維持する小国日本がアメリカにとってどのように位置づけられていたのかを知る一つの手がかりにはなりそうである。実際は東アジアでの交易における中継基地や、当時非常に盛んであった捕鯨業の食料・燃料の補給地や避難所等を日本に求めるための開国要求ではあったが、その一方で中西が指摘するように、アメリカの国家的理想を支えるプロヴィデンス言説が根底にあったことも事実であろう。ペリーが日本を砲撃しなかったのは「発砲厳禁令」を受けていたからであるが、「特異で孤立した国民を文明諸国の家族に引き入れようというこの目前の試みが、流血の手段に訴えることなく成功するように神に祈る我々もまた、(流星の出現を)そのように(日本開国への吉兆)と解釈したい」(Hawks 233)と記した彼の心情もまた事実であろう。また幕府側が「自らの対外経験と国際政治の現実をみて<超大国>イギリスより<新興国>アメリカに親近感を抱き、積極的にアメリカとの関係を模索」(加藤 249)したという見解もある。当時のピアス政権が交戦回避と発砲厳禁の方針を打ち出し、ペリーが主張した琉球や小笠原の占拠を認めなかった点も、日本開国をプロヴィデンスの計画の中に位置づけようとしたアメリカの国家としての意志と無関係ではあるまい。政権を担うピアスと生涯の親友であり、大統領選挙において『ピアス伝』を執筆して勝利に貢献したのがホーソンであったことから、幕末の日本と彼との浅からぬ因縁を感じざるを得ない。そのホーソンがプロヴィデンスの国政への適用において性急で強引な要素に否定的であり、じっくりと機を熟すのを待つという姿勢を重視していたことを見逃してはならないであろう。いわば、日本はアメリカ流の理想を実現するに当たって、一種の試金石の役割を果たしていたとも言えそうである。しかも、そこにホーソ

ンというアメリカ作家が微妙な形で関係していることも興味深い。この関連性を軸に、明治維新前夜の日本、特にその近代化を牽引した薩摩藩の状況が示す、世界の中での日本の位置をアメリカとの関係を中心に考えてみたい。その際、今年2015年にユネスコの世界文化遺産に認定された「明治産業革命遺産」において、鹿児島県内の世界遺産に登録された集成館事業の生みの親である第11代薩摩藩主たる島津斉彬（1809-1858）、および彼に多大な影響を与えた曾祖父の島津重豪（1745-1833）を中心に考察する。

2. 島津斉彬の統一国家日本の夢とホーソーンの産業革命観

薩摩藩（現在の鹿児島県）は江戸時代の外様大名の藩でありながら、石高では加賀100万石に次ぐ77万石の全国第2の大藩であった。しかも島津斉彬は、藩内のみならず全国の大名間でもその英明ぶりを称賛されていたという（下堂蘭『島津斉彬のすべて』74-78）。その理由として3点ほど挙げる事ができよう。第1に、彼が幕末の激動の時代に、大名の連合体による近代的集権体制への移行策や近代科学と産業の導入による富国強兵・殖産興業の取り組みを通して当時の政治体制の変革を牽引していたこと、第2に、それを可能とした頭脳と国際的視野および豊富な財力の所有、そして死後の影響力をも視野に入れるならば、第3に、彼自身が志半ばに倒れた後もその遺志を継いで明治維新による日本の近代化を成し遂げることとなる、西郷隆盛や大久保利通などの人材育成と登用であると言えよう。本稿では、ホーソーンとの関連性や世界史的視点から、第1、第2の点についてのみ考察した。

まず第1点目であるが、斉彬は当時の徳川幕府老中首座の阿部正弘や徳川斉昭、土佐の山内豊信（容堂）、越前の松平慶永（春嶽）、宇和島の伊達宗城などと組み、改革派大名の連合体による近代的集権体制をもって幕藩体制を改革し、いわば新たな「統一国家日本」（高野『島津斉彬のすべて』17-23）を創ろうとした。むろん、それは、当時の世界情勢の中で幕藩体制による日本の独立維持は困難であるという危機感からであった。日本は既に1800年代初期から交易を求める外国との接触にさらされ、鎖国体制は次々に訪れる外国船の圧力に徐々に揺るがされていたが、西洋列強の脅威は1840年の英国とのアヘン戦争による清の敗北、および2年後の不平等な南京条約締結の結果の開国によって国内でも一段と現実味を増し、1853年のペリー来航で一気に頂点に達した。

その間斉彬は、父斉興が隠居を洩り1851年に43歳で藩主に就任するまで世子の時代が長かったため、江戸の知的な環境において蘭学者を優遇し洋書の翻訳研究を行うなど開明的で学問に優れ、また藩主就任後にはアヘン戦争を含む世界情勢に関する書物を琉球に滞在した英国人宣教師から入手するなど、薩摩藩独自の立場もあって海外事情を知る便宜があり、当代随一の外国通であった。早くも19歳で、「大大名には惜しいので小身の大名にし、その上で老中にして国政に当たらせたい」といわれるほど英名の評判が高かったという（下堂蘭『島津斉彬のすべて』77-78）。また、諸大名と交流して知己も多く、現状への危機感と将来の展望を共有する改革派大名たちの中心的位置を占め、老中阿部正弘とも意を通じていた。国家の独立を維持するため、藩主就任後その優秀な頭脳と豊かな人脈を駆使して斉彬がまず奔走したのは、13代将軍家定の後継問題と薩摩における近代科学の導入による富国強兵・殖産興業、即ち集成館事業であった。

ここでホーソーンと関連付けながら世界の中での薩摩および日本の位置を考えるのに必要なのは、当然ながら后者である。興味深いことに、ホーソーン（1804-1864）と斉彬（1809-1858）の生涯は時期的にほぼ重なり、またホーソーンが46-47歳で『緋文字』（1850年）と『七破風の屋敷』（1851年）を立て続けに出版して一躍国民的作家になった時期と、斉彬が43歳で満を持して薩摩藩主となり（1851年）国政参加の表舞台に登場した時期も一致している。つまり、二人がかなり遅い開花の時を迎え、生涯で最も華々しく活躍した約10年間はほぼ重なっているのである。その背景となったのは英国から始まった産業革命（1760年代-1830年代）が終わった時代であり、産業革命を経た欧米の機械文明が大量の製品の市場と原料を求め、また飛躍的に強化された軍勢力が植民地を求めてアジアへ押し寄せた時代であった。そして長崎の出島を除けば、日本国内で最も頻りに外国船が来航・上陸したのは薩摩藩であった。尾口義男が作成した略年譜によれば、1824年の宝島事件（英国捕鯨船員が牛を求めて射殺される）、1827年に英国船ブロッサム号の那覇来航、1832年に英国船が次々に来航、1844年にフランス軍艦アルクメーム号の琉球来航と貿易や布教の要求、1845・46年に英国船の那覇来航、1846年にフランス艦隊が琉球に開国要求、1850年英軍艦が那覇に来航、1852年には英軍艦が那覇に来航し艦長らが強引に首里城に入る、といった具合であり（『島津斉彬のすべて』248-51）、これらの延長線上に1853年アメリカのペリー浦賀来航と翌年の日米和親条約締結があった。ホーソーンが領事として英国に向かった前後の時期には、母国アメリカと赴任先の英国は共に日本に強く働きかけていたのである。明らかに日本は、西洋からアヘン戦争後の中国に続く市場として注目を集め、植民地化の危機に曝されていた。そして、1853年に勃発したクリミア戦争にロシア、英国、フランスが参戦してい

る間に、アメリカは武力を背景に一気に日本開国を成し遂げたのである（『かごしま文庫⁷⁹ 島津斉彬の挑戦』22-25）。

こうしてみると、アメリカ人ホーソーンと日本人斉彬は、文学（ホーソーンは官吏としての顔も持っていたが、作家の役割に比べると副次的である）と政治という異なる分野においてではあるが、各々が19世紀の自国を代表するようなエリートであるという共通点を持つと同時に、産業革命を挟んで革命を起こし推進した側——正確には英国から30～40年ほど遅れて産業革命に加担した側——とその煽りを喰って翻弄された側であり、場合によっては宗主国と植民地という対立構図の中に位置していたかもしれない対照的な存在であったと言える。確かに作家ホーソーンは産業革命の恩恵に浴し、1849年頃から頻りに鉄道を利用し（CE VIII）、53年に在英アメリカ領事としてリヴァプールに赴任してからは、領事職をさぼってでも英国全土に張り巡らされた鉄道網を最大限に活用して歴史的遺跡や文学ゆかりの地を巡っている（CE XII, XXII）。その結果、領事職に就いた年の翌年1854年には、職務怠慢のかどでアメリカ議会がホーソーンを非難して領事職の賃金引き下げを検討し、55年には正式に給与減額が決定されたほどである。それでもなお、彼の旅行熱は衰えなかったという（村田 212, 藤村 327）。

その一方で、彼は1843年に「天国行き鉄道」を発表し、産業革命の最大の発明の一つである鉄道と蒸気機関車を採りあげ、バニヤンの『天路歷程』では主人公が徒歩で苦勞して天国に至った精神的プロセスを、天国行き鉄道に乗って短時間で気楽に辿ろうとする乗客たちの精神的墮落を描いて揶揄し、機械文明の利便性がもたらす人間性の退廃を痛烈に批判してもいる（CE X, 186-206）。また『七破風の屋敷』では、老いた没落貴族のクリフォードが汽車で妹へズジバと逃亡を図る場面で、いつもの周囲に依存した鈍い精神状態から一気に鉄道から翼をもらったとばかりに高揚して滔々と科学技術を絶賛するが、一時の興奮が冷めると以前にも増して鬱状態に陥る姿が描かれている（CE II, 260）。それは、あたかも機械文明のもたらす幸福感や全能感が一時的・表面的なもので、決して現実の人間精神の改革や持続的な幸福に繋がるものではない、と言わんばかりである。同時に、彼らを支配せんとするピンチョン判事は、村田希巳子が論じるように鉄道資本をもって知事の椅子を狙う資本家の腐敗の象徴となっており、作者は科学技術の進歩や機械文明の発展の陰に潜む資本家の横暴や政治との癒着を厳しく糾弾していると言える（村田 210）。作品における両義性や複数視点の提示による曖昧さはホーソーンの特徴であるが、ここには実生活と作品世界での主張にある種の矛盾が見られると言えなくもない。

しかし、近代的交通機関の活用も、彼の場合は作家として文学的関心を満足させ創作の素材を探すための手段としてのものにほぼ限定されている。そして、鉄道や蒸気機関車の利用体験も踏まえて科学技術の進歩や機械文明の発展に伴う負の部分に注目し、作品化したのであろう。当時の機械文明礼賛の熱狂に浮かれていたアメリカの国家的風潮から見れば少数派の見解ではあったが、世界史的視点から見れば、それは18世紀から19世紀初頭にかけて産業革命に加担した側の先見の明であり、一歩進んだ文明批判であった。ホーソーンが警鐘を鳴らしていたこの負の遺産は、産業革命が推進してきた資本主義経済のもたらす腐敗や格差、科学技術の進歩に伴う道徳的墮落や地球環境問題等として20世紀に至って我々自身の現実となり、彼の視点は既に我々に共有されていると言える。

他方、産業革命を背景とした欧米の侵略と支配欲に翻弄される側の島津斉彬は、薩摩藩における集成館事業として西洋の科学技術の導入と産業の近代化による富国強兵・殖産興業に取り組み、その成果を幕府を通して日本全体に広げようと必死の努力を続けていた。世界史的視点から見れば、産業革命で遅れをとったアジアの小国を牽引して、公私共に近代化の最前線に立つ存在であったと言える。「公」というのは、近代的な統一国家日本の構築を目指して西洋列強に負けない国防体制を整えようと、主として西洋式軍艦・蒸気船の建造や大砲製造のための反射炉建設といった「強兵」に取り組む政治家の立場である。その成果は、1858年に勝海舟と共に咸臨丸で薩摩を訪れたオランダ軍人カッテンディーケが、土地の様子や種々の工場群を見た印象を、「（薩摩が）想像していたような小さな田舎町ではなく、・・・日本国中の大都市の一つ」であり、「時勢に遥かに先んじている主君の統治下に」あり（カッテンディーケ 95）、「ロンドンに持って行っても決して恥ずかしくないような立派な岸壁が連なっている」などと驚きをもって記録しているほどであった（98）。高野澄は、「産業革命の本拠のロンドンと同じ程度のものが、ここ鹿児島には備えられていた・・・斉彬は鹿児島をロンドンのような近代産業都市に育てようと決意し、その成果がオランダ人カッテンディーケによって確認された」（『島津斉彬のすべて』16）と述べる。同時に、斉彬はその成果を全国に広げることで日本の国防に役立てようと努め、大船建造禁止令の撤回を幕府に働きかけ、1853年に幕府は全国に解禁令を出すに至る。また、薩摩藩の建造軍艦第1号の昇平丸を1855年に幕府に献上している。それ以外にも、ガス灯の点火、電信機、活版印刷術、紡績業、医薬品等にもある程度の成功を収めている（筑波『島津斉彬のすべて』148-49）。

そして「私」とは、銀板写真（ダグレオタイプ）、着色ガラス（薩摩瑠璃、あるいは薩摩切子）、陶磁器（御庭焼）等における技術革新への——どちらかといえば芸術・文化面に属するような分野への——情熱である。しかしながら斉彬自身

は、銀板写真を「父母の姿を100年先にも遺す貴重な技術」であるとして現実的有用性を主張し、ガラス器や陶磁器についても将来の外国貿易に備えて輸出品としての価値を強調し、私的関心より「富国」・「殖産興業」の目的を前面に出している（筑波 153-57、『島津家おもしろ歴史館 2』53-54）のは、「公」を意識せざるを得ない立場だったからであろう。実際、オランダ人医師ポンペが驚嘆、絶賛した薩摩瑠璃（筑波 156）の製造は、斉彬の死後はいったん縮小され明治期にはほぼ途絶えていたが、昭和期に復興して現在も鹿児島県を代表する工芸品として知られている。同様に、斉彬は欧米人が好むようなあでやかな絵付けを施した薩摩焼を開発し、彼の死後、それは1867年パリ万博や73年ウィーン万博で高く評価され、「SATSUMA」と呼ばれて世界中で愛好されるようになったのである。

銀板写真（ダゲレオタイプ）は1839年にフランス人ダゲールによって発明され、産業革命期にヨーロッパを席卷した写真術であるが、1848年に長崎の上野俊之丞が機材一式を輸入して日本に伝来した。この機材も斉彬が入手したといわれ、家来に蘭書の翻訳と技術習得を命じ、自身も実験を重ねた。更にオランダから撮影機械と薬品類を取り寄せ、試行錯誤の結果、ついに1857年9月17日に鶴丸城で袴姿の斉彬の肖像写真を撮影することに成功し、現在国の重要文化財に指定されているその写真は、日本人によって写された現存する最古の写真と言われる貴重なものである（『かごしま文庫[®] 島津斉彬の挑戦』122-25）。斉彬のダゲレオタイプに対する強い関心を立証する史実であると言えよう。またその頃には、英国で次世代の湿版写真術が発明されて急速に広まり、既にオランダ人が日本に持ち込み、斉彬はその研究にも着手していたと言われ、実際に自分の娘3人を自身で撮影したとされる写真が残っており、形見の品の中にカメラ等の一式が遺されていたという（鮫島 313）。

関連して、1851年出版されたホーソーンの『七破風の屋敷』では、主人公の一人ホルグレーブが催眠術師であると同時に銀板写真家に設定され、他者の心を写真に写し取ることでできる神秘性を付与されている。常に「人の心の真実（CE II, 序文）」を描くことを信念としていたホーソーンは、産業革命の成果である新技術のダゲレオタイプについても、隠された内面を暴露する術としての神秘性に注目していたのであろう。産業革命の生み出した蒸気機関やダゲレオタイプといった科学技術に対する斉彬とホーソーンの受け止め方の違いには、産業革命を起こした側とその煽りを喰って翻弄された側との立場の違いに加えて、日本の再生を先導するような新しさにひたすら惹かれた政治家斉彬と、科学の進歩や機械文明の発展に懐疑的で、人の心に注目せずにはいられなかった芸術家ホーソーンとの違いが越えがたい溝となっているようにも思われる。

3. 斉彬の国際的視野と島津重豪、及び薩摩藩の特殊性

以上の活躍を可能とした斉彬の頭脳と国際的視野、そして豊富な財力はどこから来たのであろうか。まず、彼の国際的視野を考えるうえで曾祖父である島津重豪の影響を見逃すことはできない。島津重豪（1745-1833）の生涯は世界史的には産業革命期にほぼ重なり、日本においては西洋列強が産業革命の成果をもってアジアに目を向け、植民地化を図って押し寄せる時代の前夜に位置づけられる。当時の開明的な大名は海外に関心を持ち、鎖国政策のもとで唯一海外への窓口と認められていた長崎の出島を通じてもたらされる蘭学や異国の文物にこぞって触れようとした。その当時、蘭癖大名として名を馳せたのが島津重豪であり、その異文化への関心の高さは並外れており、若い頃から中国やオランダの文化に触れ、中国語の辞書の編纂やオランダ語の勉強などにも力を注いだ。祖母は五代將軍綱吉の養女から八代將軍吉宗の養女となった竹姫で、両親を早く亡くした重豪は10歳から7年間を江戸でこの祖母に育てられた。彼女は公家の娘として生まれ、京都と江戸しか知らない教養ある洗練された女性であったため、彼もその影響を深く受けたようである。それは、生涯を通じて薩摩藩士の荒々しい田舎くさい風体や言語の矯正に力を入れ、洗練された文化の導入や異国への関心に見られる鹿児島離れのした政策に表れていると言える（芳『島津重豪』10-13）。

この重豪の斉彬に対する影響は、大きく2点ある。まず、重豪が生来賢明であった斉彬を非常に寵愛していたこと、そしていわゆる蘭癖（異文化への関心と導入）の影響である。前者を示す逸話は多いようであるが、一例を挙げておく。重豪が大事にしていたガラス器一式の1つを壊した家来が辞職を願い出たのを知った11~2歳の斉彬は、そのガラス器一式をねだって重豪から譲り受けたうえで、所有者の自分が気にしていないのだから家来を許してくれるように頼みこんだという。それには「邦丸（斉彬）の知恵には我も及ばぬ、もともとガラス器に用はなかったのだ。賢いものよ」と重豪も舌を巻いたという。また、重豪は折に触れて「邦丸が成人した後を見たい」とか「名君になるだろう」とよく言っており、家臣は重豪の機嫌が悪い時には斉彬の来訪を待ち望んだという（芳『島津斉彬』13）。腹違いの弟久光を次の藩主に据えたいと望んだ実父斉興から、43歳まで藩主の座を譲ってもらえなかった斉彬にとって、そのような曾祖父の愛情は、世子

(為政者の後継者)としてどれだけ心強かったことであろう。

次に重豪の蘭癖の影響であるが、それを示す一例は、当時鳴滝塾での蘭学・医学の指導で著名であったシーボルトが江戸に上る際に重豪と会見したという記録である。このとき重豪に同行したのが、18歳の斉彬であった。シーボルトは彼について「薩摩の若君(シーボルト 185)」と記す以外はほとんど記録していないので、まだ若く蘭学にも通じていなかった彼の姿と、それを契機に曾祖父譲りの蘭癖となっていくことも頷ける。後に彼が用いた蘭学者の多くが、シーボルトの門下生であった。重豪は優れた後継者として彼を薫陶し、彼もよく期待に応えたのである。シーボルトは、当時82歳の重豪を65歳くらいにしか見えないと健康ぶりを記し、多彩な話題について記録している。オランダ語もかなり身に付け、鳥類や獣の剥製法を問うなど、重豪の知的好奇心の強さが伺われる。シーボルトは彼のことを「この身分の高いオランダ人の庇護者」と呼び、その蘭癖ぶりについて敬意を込めて記している(シーボルト 185-86, 芳『島津斉彬のすべて』109-11)。彼の編纂事業の代表とも考えられ、農業生物百科全書ともいえるべき『成形図説』(1804年に一部刊行)は、1773年に前身『成形実録』の編修に着手してから30年以上をかけて編纂されたが、物の名前は漢名・和名に加えてオランダ語の名称も付けられている。彼は「当時の諸大名の中でも最も早いローマ字学習者」とされ、オランダ商館長ティチングは、重豪が手紙の中で秘密事項はオランダ文字で書いていた、と『日本風俗図説』に記しているという(芳『島津斉彬のすべて』113) 因みに、彼の書いたローマ字書きの「君が代」が鹿児島市の尚古集成館に保存されている。

蘭学ばかりでなく、重豪の自然科学への傾倒ははずば抜けており、彼が設置した研究施設としては明時館(後の天文館:天体観測所・暦学の研究機関 1779年)、医学院(医学研究所・医師の養成所・診療所 1774年)、数箇所薬園がある。また、外国文化導入に関わる書物の編纂にも力を入れ、半世紀近くの年月を要した中国語辞典『南山俗語考』(1812年)、『質問本草』(琉球及び屋久諸島の草木の薬用効能について中国の学者に質問し、160種についての結果をまとめたもの 1786年)、『琉客談義』(琉球からの使いの談話を筆記したもので、通訳抜きで中国語で重豪が直接対話した問答 1797年)、『鳥名便覧』(西洋・和漢の鳥類の名を編集したもの 1830年)、重豪が与えた資料をもとに本草学者が著わした『琉球産物史』がある。また施設建造や書物編纂ばかりでなく、海外からの種々の物品の収集も非常に盛んに行なった。歴代のオランダ商館長との交際やオランダ通詞との交流、その任用、シーボルトを初めとする外国人学者との交流等によって多くの物品のやり取りがなされ、収集品は江戸の藩邸の中に建てられた「聚珍宝庫」という展示場に収蔵された。芳即正によれば、その中には陶磁器や美術品などと共に外国産の動植物の標本がかなりあったと言われ、シーボルトに直接学んだ剥製法が生かされていたようで、イグアナやオランウータンの剥製が含まれているコレクションの絵図が見られる。(『島津斉彬のすべて』147, 『島津重豪—薩摩を変えた博物大名』44, 45, 106)。このように開明的な曾祖父に既述した如く可愛がられて育った斉彬が、彼の影響を受けたのは自明のことであろう。蘭癖のみならず、彼の進取の気性と向学心も曾祖父譲りと言えそうである。筑波常治は重豪と斉彬の科学観を比較し、重豪の蘭癖に「斉彬の科学を引き出す先駆的きっかけとしてだけ価値を認めるのが、これまでの評価であった」が、「新しい知識を得る楽しみ」という科学のもう一つの目的に注目し、その楽しみに率直であった重豪の学問観を評価している。そして、彼の「楽しみの対象として博物学が存在した」と指摘する(『島津斉彬のすべて』160-62)。確かに、いわば藩主の個人的道楽といった印象を与える「聚珍宝庫」は、重豪の博物学の成果を如実に示す私設博物館と言えそうである。

さて、『近代文化史入門—超英文学講義』の中で高山宏は、18世紀ヨーロッパにおける知的楽しみの学問としての博物学について論じ、「ヴンダーカンマー(驚くべきものを集めた部屋=独)」に触れている。英語では「キャビネット・オヴ・キュリオシティーズ」や「ワンダー・キャビネット」、即ち「好奇の対象になり得るものを色々集めた小部屋」に当たり、18世紀半ばくらいまではキャビネットと言えればそれを指していたという。ヨーロッパ中の貴族が競って珍品を集め、コンテストのようなことをやっており、イギリスではトラデスカント父子の「ノアの方舟」と仇名されたキャビネットが有名であったらしい。そして、珍品の物量を競い合っていた私的な「ワンダー・キャビネット」の「驚異」の文化が、1753年の大英博物館の設立と共に消滅し、博物学は国家に管理された分類学に統御される「差異の世界」へ、分析的な理性の文化へと移行していったと述べる(206-09)。これと比較してみると、重豪が珍品収集を楽しんでいた様子は、イギリスでは「ワンダー・キャビネット」の時代の貴族を彷彿させる。彼は「聚珍宝庫」の碑文に、国内外の珍品の収集や植物の栽培、動物の飼育などは「世界の真実を極め知ろうとしたため」であり、それらを書物に記して記憶に留めようとしたのは「学問の余技」で「一つの楽しみ」であると述べている(『江戸の趣味生活—薩摩の大名文化「重豪の時代」展』7, 8)。まさに「聚珍宝庫」は、重豪の「ワンダー・キャビネット」と呼べるのではなかろうか。ただし、「聚珍宝庫」は1827年に建てられたので、イギリスで18世紀半ばに「ワンダー・キャビネット」時代が終わってから70年以上も後のことではある。しかしながら、1753年の大英博物館の設立時には、重豪は8歳であり、長崎に23日間も滞在して異国文化を満喫した

のは1771年26歳の時である。それ以前から異国文化への関心が高かったと想定されるところから、彼の「驚異」の博物学への関心も、世界史的な「ヴンダーカンマー」時代の最後に連なると言えるのではなかろうか。

ところで若桑みどりは『イメージの歴史』において、この16～18世紀の「ヴンダーカンマー」熱が、西欧人による非西欧への植民の開始と軌を一にしていることを指摘する。ギリシア時代の昔から、世界の中心を自負する西欧から見て非西欧は周縁「地の果て」であり、珍奇なもので満ち溢れているとイメージされ、恐れられていたが、大航海時代を経て16～18世紀にオランダ、イギリス、フランス、スペイン、ポルトガルによる世界植民地化が始まると、非西欧はまだ見ぬ「驚異」から現実に「調査・収集・所有」すべきものになったのだという。西欧は科学思想や技術の発達により「世界の発見者」「世界の宗主国」になる一方、アジア、アフリカ、アメリカは「発見され、植民される」対象となった。そういった植民地の「珍奇」な動植物の収集に熱中する君主や富豪が持っていたコレクションが、「驚異の部屋」即ち「ヴンダーカンマー」であり、「ワンダー・キャビネット」だというのである(19-24)。そうであれば、「驚異の部屋」とは呼びながら、実際は「ヴンダーカンマー」は純粋な「驚異」の収集から植民地化による「侵入と支配と所有」の成果へと変質を遂げていったということになる。

以上を前提にすると、島津重豪の博物学への傾倒や珍品収集の楽しみは、本来なら西洋列強に「発見され、植民される」対象であったはずの日本の一大名が、「世界の発見者」「世界の宗主国」である西洋を含む異国の珍奇な文物の収集に楽しみを見出し、「ヴンダーカンマー」まで作ったという逆説的な現象に見えて興味深い。しかしながら、アヘン戦争以前の1833年に彼が没するまで、異国船の圧力も重くはなく、侵略の脅威もさほど感じられなかったであろう。彼は、自国が西欧から「発見され、植民される」対象でありうると考える危機感を、どれほど切実に持ったであろうか。また1787年に隠居するまでの重豪の時代は、日本では田沼意次の開明政策による江戸の自由な気風も影響し、全国的に海外への関心が高まった時代であり、重豪は田沼とも親しかったうえに11代将軍家斉の岳父でもあった。「高輪下馬将軍」と仇名されるほどの権勢を誇った重豪が(松井 14)、ある意味で無邪気に——「聚珍宝庫」に見られるように——博物学を楽しむことができたのは、そのような時代背景のなせる業とも言えよう。

重豪の楽天的態度のもう一つの要因として、薩摩藩が実質的には——名目上は徳川幕府が支配する形をとるが——日本で唯一の異国(琉球)支配者であったことが挙げられよう。琉球は明の時代から中国との主従関係(冊封体制)に組み込まれ、年に一度の進物を贈る進貢を通して、アジア諸国から中国への進貢品やその見返りとしての中国製品が集まる東アジアの交易中継基地として繁栄していた。1609年に島津氏が幕府の許可のもと琉球に出兵し、琉球王国を支配下に収めたが、その目的が領土獲得でなく交易独占であったため、琉球はその後も独立が認められた。即ち、琉球は一応独立国として存続してはいたが、実際は中国と薩摩藩に二重に従属するという複雑な立場であった。徳川将軍家や島津氏との主従関係を確認するため、琉球は定期的に使者を送ったが、その際には幕府や薩摩藩が異国支配を誇示して権威を高めるために異国風をことさら強調させていたという(『島津家おもしろ歴史館2』9-10)。同時に、薩摩藩では琉球や中国等の文化や物資が流入し、豚肉やカステラを食すといった食文化にも見られるように、その影響を強く受けることになった。このような歴史を踏まえれば、重豪の「ワンダー・キャビネット」としての「聚珍宝庫」も、琉球に対する薩摩藩の「侵入と支配と所有」の成果を出発点としていたのかもしれない。しかしながら、琉球の背後にある中国の文化に対する日本の畏敬の念、及び島津氏の目的が領土獲得でなく交易独占であったことも影響したのか、自身を世界の中心であり「正常」と位置づけ、非西欧を「地の果て」に住む野蛮な「異常」と見なして、珍奇なものを収集・所有しようとした西欧の「ヴンダーカンマー」の持つような歪みは、重豪には見られない。それだけ純粋な博物学への情熱と、「世界の真実を極めろ」という素朴な知的好奇心が老いてなお健在であることに、驚きと共に小気味良さを禁じ得ない。確かに筑波の言うように、重豪の博物学への取り組みは、その純粋な学問への情熱のゆえにもっと評価されて良いと思われる。

最後に、斉彬の国際的視野をもたらした要因に薩摩藩の地理的な特殊事情があることは言うまでもない。ペリーは1853年、まず琉球(沖縄)に到着し、小笠原島の探検に向かった。これは、16世紀の大航海時代以来、ヨーロッパからアフリカ、東南アジア、中国南部を経て琉球から奄美などの南西諸島を伝わって南九州に至るルートが西洋と日本を結ぶ海路であり、アメリカもまた19世紀にそのルートで日本に到達したことを意味している。鉄砲やキリスト教の伝来が南九州から始まったのもそのためである。つまり、江戸時代の薩摩藩は外国の勢力に最も早く曝される日本の南の玄関口であり、当然ながら斉彬は国防の最前線に立たざるを得なかったのである。それが彼を海外事情に敏感にさせ、国際的視野を広げる大きな要因となった。また、琉球にきた西洋人から海外の情報を入手し、琉球政府を通して貿易船を清に派遣する中で広く海外情勢を知ることで、彼は当代随一の海外通になり、国政における指導力を発揮することになったのである。

彼の活躍を可能にした財力についても、琉球を抱える地理的特殊性が大きく影響している。重豪が推進した奄美大島・

徳之島・喜界島の三島砂糖の専売制や清との交易による収入——特に密貿易——は、藩に莫大な利益をもたらした。松井正人によれば、薩摩が琉球・中国貿易を隠れ蓑として巨額の利益を得ていたことは、1829年の密貿易の純益が34,000両であり、公認貿易と合わせると約45,000両に上り、藩の全産物料の約4分の1に匹敵したということからも分かる。これは、幕府のオランダ・中国貿易の純益の約2倍弱であった。1827年には500万両にもものぼった藩内の負債に歴代藩主は苦しんだが、重豪が登用した調所広郷は、血の滲むような努力と工夫により1836年には負債の返済に成功したのみならず、4年後には備蓄金50万両と諸営繕費用200万両を蓄えて重豪との約束を果たした。その調所の工夫の中心は、密貿易や砂糖等の専売制の徹底、商人からの藩負債を250年の年賦で返済するという実質的踏み倒しであった（松井 219-42）。即ち、西洋列強の脅威に対抗する斉彬の集成館事業を可能たらしめ、彼の死後も明治維新を主導する財政基盤を築いた大きな要因の一つが、琉球や南西諸島を抱える薩摩藩の地理的特殊性であったことは見逃せない。

結び

以上、日本開国に関連してペリーとホーソーンにおけるプロヴィデンス言説を比較考察することで、幕末の日本が産業革命後のアメリカにとって占めていた位置をアメリカの価値観の面から再考し、日本開国が「神に導かれるアメリカ」という神話の中に位置付けられ、共和政体の試金石であったとも考えられること、しかしながらホーソーンには過度のプロヴィデンス言説の利用や近代科学そのものに対する批判精神があったことを確認した。次に、明治維新前夜の薩摩藩の状況を島津斉彬の統一国家建設の夢を実現するための近代化への挑戦という視点から考察し、同時代に活躍したホーソーンと斉彬の立場を比較し、対照性を浮き彫りにした。更に、斉彬に巨大な影響を与えた曾祖父重豪の蘭癖を中心に、斉彬を通じた日本の近代化への貢献のみならず、彼の博物学への取り組みを世界文化史の文脈の中に位置づけ、「聚珍宝庫」が一種の「ワンダー・キャビネット」であることを琉球との関係も視野に入れながら考察してきた。

さて、上記のこと以外で幕末から維新にかけての日米関係の注目すべき事象を時系列で俯瞰してみると、土佐藩の漁師の息子ジョン万次郎の活躍が目立つ。アメリカからの帰国（1851年）に際し、斉彬が直接取り調べて海外情勢・洋式造船術・航海術等を聞き取ったこと——その縁で67年には薩摩藩に航海術や英語の教授として藩校（開成所）に招かれている——、ペリーの黒船に対応するため幕府から軍艦教授所の教授に抜擢され、日米和親条約締結に尽力したこと（1853年）、遣米使節団の一員として活躍したこと（1860年）、幕府の軍艦操練所教授として働いたこと（1862年）、維新後は明治政府の開成学校（後の東京大学）英語教授に就任し（1869年）、後半生は教育に捧げたこと等である。また福沢諭吉は、幕府の文久遣欧使節団（1862～63年）の一員としてヨーロッパを回り、帰国後著した『西洋事情』にアメリカ独立宣言全文の翻訳を掲載した。更に、幕府の軍艦受け取り委員会の一員として渡米した（1867年）際にホーソーンの名義出版による『パーレー万国史』を日本に持ち帰ったのが彼の作品の日本による受容の嚆矢であり、この世界史の本が明治の文明開化に大いに寄与したことは特筆したい。最後に、岩倉使節団（1871～73年）が米国に8か月も滞在したことを追記しておく。幕府は条約調印の延長線上で日米関係の深化を図り、薩摩藩もまた1863年の薩英戦争の結果、65年の英国留学生および翌年の米国留学生の派遣を経て英公使パークス来鹿など、英米との絆を強化していった。重豪の蘭癖時代のオランダや中国中心から英米中心へと、日本にとっての国際関係も変遷していったのである。

ホーソーンは、峻厳なピューリタンの伝統を継承するセイラムの、それも国家を代表するような古い家系に生まれ育ち、17世紀の先祖の行った冷酷な所業（渡米したホーソーン家の初代ウィリアム・ホーソーンのカエイク教徒迫害や二代目ジョン・ホーソーンの魔女裁判における非道な裁判）を非難し、彼らに代わって罪を贖おうとしたことは有名である（CE I, 9-10）。そして、その系譜に連なるものとしての独善的な指導者（「メイポールの五月柱」のエンディコット、『七破風の屋敷』のピンチョン判事）や科学者（短編「瘧」のエイルマー）、似非科学者（『緋文字』のチリングワース、『ブライズデイル・ロマンス』のウェスタヴェルト、「ラパチニの娘」のラパチニなど）を造形して批判し、近代科学そのものについても人間性の退廃を招く負の面を「天国行き鉄道」や『七破風の屋敷』で痛烈に揶揄した。また大井が指摘するように、『緋文字』に見られる「庭園の神話」に裏打ちされた17世紀植民地時代のピューリタンの心性には、ホーソーンの生きた19世紀アメリカの利己的な国家主義が反映されており、作家は作中で当時のアメリカの独善的な膨張主義を暗に批判している。それは、中西の考察にあるように、プロヴィデンスの行き過ぎた国家主義的解釈への揶揄としても表れている。しかしながら、植民地時代を牽引したピューリタンたちに対するホーソーンの気持ちは両義的でもある。「灰色の戦士」や「エンディコットと赤い十字」では、植民地へのイギリスの圧政に抵抗した勇敢な人々として畏敬の念を込めて彼らの像を描いており、そこには時代の制約の中で懸命に国造りに励んだ先祖たちへの複雑な思いが見え隠れしているの

である。それはいずれも、民主的な共和国への忠誠心と神のプロヴィデンスへの信頼が表裏一体となった作家の価値観の表出であろう。

一方、ホーソーとほぼ同時代を生きた島津斉彬は、徳川の幕藩体制を変革して統一国家を実現しない限り、日本の植民地化は免れないとの認識のもと、新たな国造りの手段として産業革命の成果を取り入れ、近代科学に依拠した機械文明を導入することで富国強兵・殖産興業を実現し、西洋列強に伍した立場を獲得しようとした。その表れが薩摩藩における集成館事業であり、様々な不利や障害を克服しながらひた走りに走った斉彬には、追う立場の者として当然のことながら、近代科学や機械文明の負の面に対する疑念や警戒心は見られない。誤解を恐れずに言うなら、アメリカの17世紀植民地時代のピューリタン第一世代が、冷酷なまでの強引さで神意に適う理想郷である「丘の上の町」を建設しようと努め、また本国イギリスの圧政に抵抗して断固戦ったように、19世紀の斉彬もまた日本の独立を維持しようと必死だったであろう。幕藩体制に代わる新たな統一国家を目指した斉彬は、集成館事業を初めとする近代化政策に負の面が含まれようとは夢想だにしなかったであろう。彼の業績は、ごく短期間に西洋の産業革命の成果を吸収・咀嚼して実用の域に到達させた驚異的なもので、約1,200人が働く集成館事業の施設に比肩するものは国内はもちろん中国や朝鮮にも無かったという。そして彼の急死で一時的に頓挫しながらも、彼の育てた人材がリーダーシップをとることによって、集成館事業は明治維新後の日本の進むべき方向性を決定したのである。更に、その路線は現在に至るまで日本の技術力や経済力、政治力を牽引する土台となったと言える。そうであれば、我々は更にその先に歩みを進め、ホーソーが警鐘を鳴らしたような科学の進歩や機械文明の負の面に向き合っていかなければならないであろう。

ホーソーは、17世紀のピューリタン第一世代の偉大さを崇敬しながらも、彼らの業績に含まれる独善性やそれに連なる19世紀の産業革命による近代科学と機械文明の弊害、利己的な国家の拡張政策を批判し、「人面の大岩」(CE XI, 26-48)の主人公に見られるような現実に根差した純朴で控えめな心の美しさを称揚した。同様に21世紀の我々は、19世紀日本に突き付けられた世界史的課題に応え、明治維新から現在に至るまで日本の発展を支えてきたとも言える斉彬の先見の明と開明政策を評価すると同時に、その延長線上に見えてきた諸問題に自らの時代の課題として取り組む必要があると言えよう。その際に指針とすべきは、学問に競争や実用目的のためにのみ取り組むのではなく、重豪の博物学に見られるような学問を純粋に楽しむ姿勢かもしれない。そこに新たな科学のあり方へのヒントがあるかもしれないのである。また、斉彬の集成館事業の目標のうちの「強兵」よりむしろ「富国」と「殖産興業」、即ち銀板写真(ダゲレオタイプ)、着色ガラス(薩摩瑠璃、あるいは薩摩切子)、陶磁器(御庭焼)等における技術革新への取り組みや、反射炉で大砲のみならず農業振興のために農具をも製造したという姿勢ではなかろうか。松尾千歳は『島津斉彬の挑戦』に、1858年に斉彬が幕府に宛てた建白書に「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」と記したように、「下々に至るまで豊かに暮らすことができれば人は自然にまとまる。人の和はどんな城郭よりも勝るといのが斉彬の考えであった。このため斉彬は、庶民生活をも視野に入れて事業を展開したのであった。この点が幕府や諸藩の近代化路線と大きく異なっているところである」と述べている(132)。心に響く言葉である。

<注>

(1)「明治産業革命遺産」：構成資産は、九州(福岡・佐賀・長崎、熊本・鹿児島)・山口を中心に静岡県、岩手県など全国8件11市にわたるもので、相互に密接な関連性があり、全体で1つの価値を有する資産として2015年7月にユネスコ世界文化遺産に登録された。鹿児島県において第11代藩主島津斉彬の推進した集成館事業は、富国強兵・殖産興業による強く豊かな国づくりを目指して、藩主在任中わずか7年間で様々な産業の驚異的な近代化を達成したものである。その事業を偲ばせる、鉄製大砲鑄造のための反射炉を備えていた旧集成館や旧集成館機械工場、旧鹿児島紡績所技師館、そして反射炉の燃料として良質な白炭を焼いた寺山炭窯跡と集成館事業の動力水車に水を供給した関吉の疎水溝(約7kmにわたる水路)が、世界文化遺産に認められた。(「明治日本の産業革命遺産」鹿児島県企画部世界文化遺産課発行、2016 他)

(2) ホーソー作品の引用は *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* を用い、括弧内に(CE 巻数, 頁数)を記す。

<引用文献>

Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. William Charvat, et al. 23 vols. Columbus: Ohio State UP, 1962-97. *The Scarlet Letter* の日本語訳は八木敏雄訳『完訳 緋文字』(岩波文庫, 1999)による。

Hawks, Francis L. *Commodore Perry and the Opening of Japan: Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, 1852-1854*. Trafalgar Square Publishing, 2005. 日本語訳は宮崎壽子監訳『ペリー提督 日本遠征記』(角川ソフィア文庫, 2014)による。

- 大井浩二『ナサニエル・ホーソン論 アメリカ神話と想像力』南雲堂, 1986.
- カッテンディーケ『長崎海軍伝習所の日々』水田信利訳, 東洋文庫 平凡社, 2009.
- 加藤祐三『幕末外交と開国』講談社学術文庫 講談社, 2012.
- 芳即正『島津重豪』吉川弘文館, 1995.
- 『島津斉彬』吉川弘文館, 1993.
- 鯨島志芽太『島津斉彬の全容—その意味空間と薩摩の特性』ペリかん社, 1989.
- シーボルト『江戸参府紀行』齋藤信訳, 東洋文庫 平凡社, 2003.
- 高山宏『近代文化史入門 超英文学講義』講談社学術文庫 講談社, 2007.
- 中西佳世子「浦賀の「流星」とプロヴィデンス—ペリーとホーソンと日本開国」『アメリカン・ルネサンス 批評の新生』西谷拓哉・成田雅彦編, 開文社出版, 2013, 363-88.
- 藤村希「ホーソン年譜」『ホーソンの軌跡—生誕200年記念論集』川窪啓資編著, 開文社出版, 2005, 316-62.
- ホークス, フランシス・L『ペリー提督 日本遠征記①②』宮崎壽子監訳, 角川ソフィア文庫 KADOKAWA, 2014.
- 松井正人『薩摩藩主 島津重豪—近代日本形成の基礎過程—』本邦書籍, 1985.
- 村田希巳子「産業革命によるホーソン文学の変容—運河と鉄道を中心として」『環大西洋の想像力—越境するアメリカン・ルネサンス文学』竹内勝徳・高橋勤編, 彩流社, 2013.
- 村野守治編, 尾口義男・芳即正・高野澄他『島津斉彬のすべて』新人物往来社, 2007.
- 若桑みどり『イメージの歴史』ちくま学芸文庫 筑摩書房, 2012.
- 鹿児島県歴史資料センター黎明館編『島津重豪 薩摩を変えた博物大名』「重豪」実行委員会, 文化庁, 2013.
- 『図録 薩摩のモノづくり 島津斉彬の集成館事業』尚古集成館, 2003.
- 鹿児島大学附属図書館編『江戸の趣味生活 薩摩の大名文化「重豪の時代」展図録』鹿児島大学附属図書館, 2001.
- 尚古集成館編『かごしま文庫③ 島津斉彬の挑戦 集成館事業』春苑堂出版, 2002.
- 『島津家おもしろ歴史館2—集成館事業—』尚古集成館, 1998.

(2015年12月11日 受理)